

養護教諭志望から進路を変更した学生への支援方法の一考察

～「語ろう会」を実施して～

舘 英津子・中林 恭子・後藤多知子・渡辺千津子

愛知みずほ大学人間科学部人間科学科

Etsuko Tachi・Kyoko Nakabayashi・Tachiko Goto・Chizuko Watanabe

Division of Sciences, Department of Human Sciences, Aichi Mizuho College

キーワード：進路変更、グループ、

はじめに

青年期は自分のキャリアについて考え始め職業観や人生観を育成する試行期であり、また学業や課外生活を通して特に自己理解が進む時期である。

文部科学省の高等学校キャリア教育の手引き¹⁾によれば高校までの中等教育の段階において自己理解を深め、ある程度の職業観を確立し、具体的に将来の進路について現実吟味を行うことが求められている。しかし実際には2004年度以降高卒者の50%以上が大学・短大へ進学する²⁾時代となり「なんとなく」「みんなが大学へ行くから」「親や(高校の)教員の勧め」など主体的に選択しないまま大学に進学してくるものは少なくない。ベネッセ教育総合研究所の調査(2012)³⁾では約90%の学生が「自分の将来の方向をみつきたい」、また80%以上の学生が「卒業までの自由な時間を満喫したい」と回答し、これと言った目的や目標を持たず、むしろそれを探すために大学に進学してきているものが大多数である傾向を示している。

さらに生徒によっては、多様な入試方法の中でごく少ない入試科目(面接と小論文のみなど)の成績で入学することもあり、特にその場合は高校段階で自分の興味・関心、能力、適性等の自己理解の深化や将来設計の立案、現実的探索や吟味が不十分となりやすい。⁴⁾その結果、大学入学以後入学前のイメージとのギャップ悩み、不適應や退学・休学、転学や転部をすることにつながるとも考えられる。大学入学以後の意識調査⁵⁾では大学以外の進路変更希望が2割、転学部・転学科希望が3割、編入希望が4割と少なくない学生が進路変更を意識しているという報告がある。

本学でも養護教諭志望で入学してもその後さまざまな理由で進路変更に至り養護教諭免許取得を選択しない学生は少なくない。

本学教員養成のコースは、養護教諭一種、中学・高校教諭一種(保健体育)、中学・高校教諭一種(保健)の教員免

許状が取得でき筆者の所属する養護・保健コースに入学する学生は年度によって若干のばらつきはあるものの入学時においてほぼ全員が養護教諭免許取得を目的として入学する。しかしここ2～3年の傾向では入学生のうち約4～5割の学生が3年進級時に養護教諭免許取得を希望しない選択をした。

先に述べたように近年は大学全入時代であり今後も就労・進路と自分の適性、能力等の十分な吟味がなされないまま入学し入学してから進路変更する学生が増加する可能性は高いと考えられ、今後もさまざまな進路に進んでゆく学生をどのように育てていくかは大学として取り組むべき重要な課題と考える。

本論文では2014年度から行っている3年進級時養護教諭免許状の取得・非取得を選択(以下進路選択)するに至るまでの本コースの支援体制、養護教諭免許取得を希望しない学生(以下非取得学生)と養護教諭養成に関わる教員(以下コース教員)との懇談会開催の経緯と実施内容について述べた後今後の学生支援の方法を考察する。

1. 進路選択に至るまでの支援体制

1) チューター制度(全学年通じて)

本学の全学的な制度の一つとしてチューター制度がある。各コースの教員が各学年10～15名ほどの担当(チューター生)を受け持ち大学への適応、出席状況、人間関係、履修登録相談などの問題に適宜対応していく。細かな対応頻度、方法等は各チューターとなる教員の裁量の任されており相性などもあり効果には多少の差が生じることがある。

2) 学修コンシェルジュ面談(1年次後期10月～12月)

これも本学の全学的な制度の一つであり学内で学修コンシェルジュと認定された教職員2名と学生1名で30分

程度の面談を1年生全員に行っているものである。教職員のうち1名は各コースの担当教員が面談者となり大学への適応、出席率、成績等についてプライバシーを確保しながら個別に面談を行っている。養護・保健コースにおいては入学時にほぼ全員が養護教諭免許状取得を希望しているため、学生の個別の状況に応じてボランティア活動の紹介、授業の自己学習方法、友人関係等の相談についてきめ細かく対応している。

3) 第1期コース個別面談(2年次後期9月～10月)

コース教員2名と学生1名で20分程度の個別面談をコース内学生全員に実施するもので、本コースが独自に設定して行っている。個々の学生に対してあらかじめコース教員が授業での様子等を話し合い、各学生の強み・課題、学生の成長後の姿などを教員間で共通認識を持った上で事前に学生が記載した面談シートを用い成績、出席率、適性、ボランティアやアルバイト経験、奨学金貸与状況、家族の意向も含め個別面談を行う。必要時、学生相談やキャリア支援センターなど学内の別の機関への紹介もしている。面談シートは「養護教諭にどの程度なりたいか」「自分は養護教諭に適性があるか」等主に養護教諭免許取得を今後希望するのか、そのための覚悟と努力をどの程度持っているのかなどを5段階で回答してもらうものである。面談後不安定になりがちな学生には授業前後において教員から声をかけ学生へ働きかける。

4) 第2期個別面談(3年次前期4月全体オリエンテーション時)

コース教員1名と学生1名の個別面談を5～10分程度行う。この面談では第1期個別面談の内容を受けて3年進級にあたって免許状取得か否かの意思確認を行っている。それにより履修登録科目の選択も異なってくるためオリエンテーション時に行っている。さらに面談が必要な学生には後日別の日に時間を取り面談を行っている。

2. 進路選択に至るまでの学生の状況

養護教諭志望がはっきりしないまま「なんとなく」「親・先生に勧められた」という理由で入学してきたり、また養護教諭志望であっても自分の能力、志向、適性等の現実吟味が不十分のまま漠然とした憧れのみで本コースへの入学した学生は実際多くみられる。しかしそのように「なんとなく」「資格取得のみ」で入学してきたとしても教員志望学生には卒業後教職に就くことを目指していくために1年次から様々な働きかけがなされていく。講義中・演習中に、全体あるいは個別に面接以外にも折に触れ職業観・勤労観の確立、職業人としての考えさせる働きかけをし、覚悟を決めて進路を選択することを促すため学生の中には授業がづらいと感じるものもいると考えられる。

そのような授業や面談を過ごす中で学生は遅くとも2年次後半から現実的な吟味をし始め、本格的な演習を伴う

授業・実習が始まる3年に進級する時に志向の変化、自己の認識の違い、能力や適性の自己受容等により結果的に養護教諭免許状取得をしない選択をする学生が出てくることになる。

3. 懇談会に至る経緯と調査内容

1) 懇談会開催に至る経緯

非取得学生は将来への選択肢が急に広がり自由な時間を謳歌しつつも当面の目標を見失うことなどで一時的ではあるがメンタル面の不安定さを感じさせ、他の人はどうしているのかなどを気にする発言も聞かれた。これまで個別を主とした支援をしてきたが非取得学生には非取得学生の共通の問題があるため教員が仲介役となりグループとして学生同士がより結びつくことで学生への支援ができないかと考えた。

(1) 調査項目

現状確認に今津らの作成した Public Health Research Foundation ストレスチェックリスト・ショートフォーム(以下 PHRF ストレスチェックリスト)^⑥の中の「Ⅰ. 不安・不確実感」「Ⅱ. 疲労・身体反応」「Ⅲ. 自律神経症状」項目の尺度を使用した。この尺度は、成人健常者の日常生活におけるストレス反応の表出を多面的かつ短時間で簡便に査定するために開発されたものであり、ストレス反応の心理的側面と身体的側面を同時に測定することができる。また、この尺度の下位尺度は4つあるが、下位尺度ごとに年代別の平均値と標準偏差がすでに示されており、回答者のものと比較することができる。各下位尺度には6つのストレス症状に関する質問項目がありそれぞれ3段階評定を行い(ない0点、時々ある1点、よくある2点)合計得点を算出する。得点が高いほうがストレス度が高い。今回は下位尺度4つのなかの以下3つを使用した。自記式、記名有りで回収袋を置いておきその場で記載・回収を行った。

懇談会アンケートは懇談会実施の直後に無記名で懇談会について「満足したか」、「また来たいか」を各10点満点で何点か、また「今後よりよい会になるために」として自由に記載してもらった。(質問紙留め置き法)

(2) 対象と手続き

201×年本学養護・保健コース入学者教職課程登録をしたもののうち3年進級時に教員免許状取得をしない選択をした学生17名のうちコース変更などをした学生の除く14名を対象とした。なお本学の場合、教員志望でなくても養護・保健コースから所属コースを変更する必要性はなく、養護・保健コースに在籍したまま卒業に必要な単位を取得して卒業・就職していくことは可能である。対象者にはアンケート記載は自由であり提出しなくても不利益にならないこと、データの使用許可と個人情報の保護について説明し同意を得た者のみ回収袋に提出してもら

った。

4. 結果

1) 懇談会の実施内容

201×年7月と12月の2回にわたり懇談会を実施した。各回とも90分間、大学内で行った。対象学生14名のうち1回目は9名、2回目は8名出席し、コース教員は4名中1回目4名、2回目3名出席した。

実施した内容は現状アンケート調査（ストレスチェック）、ゲーム（1回目生活リズムの確認、2回目構成的エンカウンター「わたしクイズ」）をした後全員が近況報告をし、最後に懇談会への満足度等に関するアンケートをおこなった。12月開催の2回目の懇談会時には近況報告の後キャリア支援センターより10分程度のミニ講座を入れた。

2) 参加学生のストレス状態

今回使用したPHRFストレスチェックリストの3つの下位尺度（Ⅰ．不安・不確実感」「Ⅱ．疲労・身体反応」「Ⅲ．自律神経症状」）の中ですべて平均より高かったものは1回目9名中3名、2回目8名中3名で、3名とも+1SDより高かった。また、2回とも3つの下位尺度で3つとも+1SD未満だったものは3人しかいなかった。2回とも同様の傾向であった。参加者は全体としてストレス度の高いものの割合が高いと思われまた2回の調査でその変化はほとんどなかった。今回、人数が少ないので量的統計としての意味づけはできないが、記名式であったため誰が実際にどの程度ストレス度が高いか確認できた。その結果と懇談会での発言内容や表情など学生の様子を教員間で話し合い、今後の授業の時の様子を見ていくことや声かけの内容などについて教員同士確認した。

3) 参加学生同士のつながり

同じ立場の学生同士が知り合う機会をつくり学生同士が繋がることをサポートすることを懇談会の第一の目的とした。そのために学生が自ら自分のことを話すような状況を作ることに腐心して構成した。

身体を動かすゲームで心身をほぐした後ゲームの中で題材にした自分が好きなアーティスト、アニメ等から近況報告につながっていったが一部の学生にとっては顔見知り程度の集団の中で自分の話をするのを負担に感じるようであった。

履歴書を書いてみて困った、××の資格取得を目標に勉強をしているなど、より具体的に就職に向けて行動を始めるなどすでに就職や将来等に向けて動き出そうとしている学生もあり、そのことに気後れするのか「特に何も話すことはない」といって話し始めるのに時間がかかるものもいた。しかしバイトは何？休日は何？と教員や他の学生から聞かれ、受容的な雰囲気の中で全員が自分の近況について話し、相互に質問をし合った。2回目の懇談会の時にはでは時期的にキャリアセンターからのアプローチがすでに

開始されたこともありさらに気後れする学生もいたが全体として1回目よりスムーズに近況報告がなされた。

4) 参加学生と教員とのつながり

教員にとってストレス度の確認などのほか実際に会って近況を聞いたことは参加学生の現状把握の機会となった。教員や親は子どもたちに「気にかけている」ことを積極的に伝えるほうがその後子どもたち自身が「わかってもらうとしてくれる」「話してみよう」という気になりより深いレベルでのコミュニケーションがすすみ、信頼関係構築につながり易い傾向にあるという⁷⁾。「先生方とも会う機会が本当に少なくなってしまうけど会えて先生方のいろんな話が聞けてよかった」等教員との関係に関する記載が会終了後のアンケートに寄せられ気にかけている様子を示せたのではないかと思われた。また実際にその後学生から教員へのアクションが増えたと感じる。

5) 参加学生の就職活動への支援

就職指導室キャリア支援センター（以下キャリアセンター）は全校3年次の11月ごろから一人ずつメールで呼び出し就職についての面談を行っている。しかし参加予定の学生の中にはまだキャリアセンターとの面談が出来ていなかったり具体的な活動に繋がっていかない学生が少なくないことがわかった。

そのためまずはキャリアセンターを身近に感じ、活用しながら就職活動に前向きに取り組める」という目標をキャリアセンターと共有しその目標が達せられるような10分程度のミニ講座をセンター職員からしていただいた。講座内容はいよいよ就職活動に向きあわなくてはならない不安な学生の気持ちに温かく寄り添う内容であり、職員との顔つなぎもでき、きっかけづくりになったと考えられた。

6) 参加学生による懇談会の評価

参加した学生のべ17名全員が「満足度」に10点満点中10の回答をし、「また来たい」も全員が10点満点中10の回答をした。

具体的にゲームについては「こういう体を動かすのは次の時もやりたい」「自分だけでなく相手のことが知れるゲームはまたやりたい」などでありまた近況報告についても「最初はあんまり喋ったことがない子もいて何を話そうと思ってたけどいろいろしゃべれて今日は本当に参加してよかった」「みんなの近況もたくさん聞けた。とても楽しかったです」といった感想がづられ、学生同士の繋がりへの機会づくりとしての目的は達せられたと考えられた。参加学生たちは会の内容について高く評価していた。

5. 考察

非取得学生へ今後どのように支援していくかそのための体制整備への課題について考察を述べる。

1) グループの深化への促進について

非取得学生の共通項は進路変更をしたことのみであり、

その経緯も理由も様々であるため凝集性があるとは言えない。会を開催する前、非取得学生自らが他の非取得学生の動向を気にする発言がみられたものの自己開示を積極的にはしたくないタイプの学生も多く近況報告でさえも負担を感じる学生もいるのではないかと考えられた。実際に具体的に就職や何かの資格取得に向けて行動を始めた学生達の前で近況を話すことに気後れする様子をみせたり特別に親しくない他人に自分のことを話し始めるのに時間がかかるものもいた。参加した非取得学生たちは個々に仲がよいものもいるが、全体としては顔見知り程度でグループとしてのまとまりはない。そのため最初にゲームなどで長めのアイスブレイクを行った後に各学生からの近況報告の時間とした。学生同士の繋がりの一助としての一定の効果は得られたがわずか 2 回でグループとしての深化を促すことには困難さを感じた。

他人の様子が気になる学生は次の目標が定まらなくて不安定になり焦っていたりあるいは逃避してあえて何も考えないようにしていたのかも知れないと思われた。しかしそれを他人から指摘されるよりグループの中で自ら気づくほうが容易に受け入れられる⁷⁾のではないかと考えグループという手法を選択した。これについてはさらに後述する。グループという手法をより効果的にするためには今後の開催回数を増やすことは困難だが少ない回数の中でよりグループの深化を促すような働きかけが必要と考えられた。

2) 学内他部署との連携について

非取得学生に限らず主体性をもたず周囲に合わせてなんとなく大学に入学してくる学生にとって未知なる将来について進路を決めるという重要な決断をしていくことは大変なストレスである。そこに大学として支援をするシステムとして本学のキャリア支援センターがある。非取得学生にとって特に今後の学生の活動に大きくかかわるのであるキャリア支援センターと連携をとることとした。

本学のような小規模校では他部署との教職員同士が顔を合わせる機会が多くまた学生の顔と名前を一致させることも比較的容易である。そのため大学の成績や出欠状況以外の性格や志向といったデータ化しにくい情報も共有し合え目標や目的について審議した上で今回ミニ講座を行ってもらった。具体的な対象者について話し合うことでより対象者に添った支援につなげられることを実感した。

しかし顔つなぎとしての役割は果たせたが今回の懇談会がその先の就職活動に結び付いたかどうかは判断できない。学生には大学全体で応援しようとしているという気持ちを少しでも感じられ今後の相談や活動につながってくれば良いと思う。

3) 教員の教育力の向上

本コースは 3 年次から教員免許状取得を希望する学生は授業の予習・復習、自己学習、ボランティアとますます

免許状取得のため主体的に活動する中で教職担当の教員との関わりが極めて密になり同じ目標を共有した学生同士の仲間意識も強くなり充実感を深めていく。その一方で非取得学生はコース教員とはほとんど接点なくなる。その状況の中で非取得学生への支援として何ができるのだろうか。

近年の就職選考にはなりすましたり印象を操作したりできるような面接だけではなく、より実際の行動が見られるグループワークがよく取り入れられておりより実践的なコミュニケーション能力や主体性が求められている。それを踏まえるとその場で初めて会った人に対しても自分の意見や考えを伝え他人の意見についても良く聞き前向きに意見交換ができるようになるとよいと考える。このような力は簡単に身に付くものではなく月単位、年単位で授業の中で育てていくものであると考える。本学では少人数であるために 1 年次よりグループワークを中心としたアクティブラーニングを取り入れているためグループとしての活動が全く初めてではない。しかし特に今回のように授業とは無関係で対象者の目的も背景が様々な中で明るく楽しい雰囲気を作ることはできたが学生がグループを通じて自己を深めていけるような支援につなげていく点については筆者自身の未熟さを感じた。集団の中で刺激したり動かしたりすることと学生自身を成長は必ずしも一致するものではないため⁸⁾、他者の考えを知るなかでより深く自己を深めていけるようなワークや働きかけが必要であろう。グループワークの教育方法についてより効果的な成長を促す支援ができる教育力を身に付けていけるよう研鑽を積む必要がある。

おわりに

本学の養護教諭コースの学生は入学時、ほぼ全員が養護教諭免許取得を希望するが 3 年進級時には 4~5 割の学生が進路を変更し免許状取得を希望しなくなる。そのような学生への一支援方法として専門コース担当教員との懇談会の開催を実施した。実施内容はストレス度チェック、構成的エンカウンター、近況報告、就職活動への支援などである。参加学生はストレス度の高い学生が多かったが懇談会の実施を高く評価し、学生同士のつながり、教員とのつながりを確認するものであったという示唆を得た。

一方課題としては 1) グループの深化への支援 2) 学内他部署との連携 3) 教員の教育力の向上が考えられた。

謝辞

本懇談会の実施にあたり、平成 27 年度愛知みずほ大学学長裁量経費「教育改革支援事業」による支援を受けました。感謝いたします。

参考・引用文献

- 1) 文部科学省：高等学校キャリア教育の手引き，2011
- 2) 独立法人日本学生支援機構：平成 26 年度学生生活調査結果
- 3) ベネッセ教育総合研究所：第 2 回 大学生の学習・生活実態調査報告書 2012
- 4) 山田裕子・宮下一博：医療系大学生の進路選択・大学適応感・アイデンティティ形成について—文献レビューによる考察— 千葉大学教育学部研究紀要，63，111-119，2015
- 5) 前掲 3)
- 6) 堀洋道監修，松井豊・宮本聡介編：心理測定尺度集 VI—現実社会とかかわる〈集団・組織・適応〉—，サイエンス社，2011
- 7) 武井麻子：グループという方法 医学書院 2002
- 8) 前掲 7)
- 9) 布花原明子・伊藤直子：看護学科における就学状況の改善に関する一試作 西南女学院大学紀要，15 2011
- 10) 山崎篤：大学生の進路変更に関する一研究 日本教育心理学会総会発表論文集 33，469-470，1991
- 11) 慶應義塾大学教養研究センター監修 新井和弘・坂倉杏介：アカデミック・スキルズ グループ学習入門 学びあう場づくりの技法，慶應義塾大学出版会 2013
- 12) 加藤かすみ他：看護師養成所 3 年課程の休学・退学と学生への支援の実態 中国四国地区国立病院付属専門学校紀要 9，142-151 2014
- 13) Nathaniel Branden : How to raise your self-esteem (邦訳 手塚郁恵訳:自信を育てる心理学 セルフ・エスティーム入門 春秋社 1992 p48 意識的な生き方
- 14) 内田樹 下流志向—学ばない子どもたち 働かない若者たち— 講談社 2009